

4月分

4月1日

社長、損益計算書および貸借対照表を見て下さい。

毎目多くの経営者の方々と数字の話をしていて、損益計算書は読めるのですが、貸借対照表が理解されていなくなり、と気づきました。私共のお客様である鈴木自工(株)の鈴木社長は、PLをPL学園、B/Sをプリジストンタイヤのことだと思っていたと冗談を言っていますが...

会社は経営計画で利益計画と販売計画を作成し、毎月計画と実績をチェックし、その誤差が意味するものを読み取って、誤りの在り方向を見つけ出しています。しかし、なかなか目標は「その通りにいかず」のが現実です。だからこそ、目標は必要なのですが利益の達成は全社員の協力が重要です。全社員に協力しても「どうか」こそ、経営計画や目標が大事になります。

しかし、貸借対照表はどうでしょうか。実は社長一人で多くの勘定科目の残高は変えらるのです。今現在のB/Sの残高は社長が自分で決めた結果なのです。B/Sで現預金が少なりのも、受取手形、売掛金、棚卸資産が目商に対して多りのも、土地、建物、ゴルフ会員権、有価証券が多りのも社長が自分で決めたのです。

反対に負債の科目である支払手形、買掛金、短期借入金、長期借入金の返済条件も全て社長が決めた結果として、B/Sの残高になっています。経営コンサルタントの「倉定」先生は、「資金運用とは、B/Sの科目の残高を変えらることなり」と言っておっしゃいます。

経営者にとって大事なのは、PLよりB/Sで未来のあるべきB/Sをつくりあげることです。そのためには、毎日の目次決算をしっかりとやって、目次決算の中で、B/Sを中心に、自社のB/Sの残高を意識的に変化させることです。例えば、自社ビル、自社工場を購入するか、貸借するかは、経営者の意思次第でどうにでも思っ方とおりにあります。また購入するにしても、自己資金か、全額借入か、又は一部借入かはまた、社長が自分のお金か「出すか」も自分で決められます。この決定の結果として、今のB/Sがあります。B/Sのよくなり、経営者は資金繰りが解放され、安心して本業に専念し、高い収益性も確保しています。特に支払手形は要注意です。手形を切っていると手形を落とすことと頭が痛い(なり)営業とか開発が出来なくなってしまう。松下幸之助さんは、「手形はやめなさい。苦しいときほどやめなさい。手形を切ると、企業は水ぶくりになる。松下電器が現金で回収するのは代理店の小売屋さんが、水ぶくりに(なり)おに」と言っていたのです。

会社をよくするためには、財務体質を強化しなければなりません。その答えはPLではなく、B/Sにあります。社長、B/Sの残高を変えれば、会社と社員が夢を語る、未来に希望の見えるB/Sに5年後、10年後にします。

今日の添付資料は、当事務所の経営計画発表のときに配布した、国歌と国旗の由来です。立派な日本人になるためには、とても大事な知識であり、私は信じています。

古田 満